太陽系第三惑星地球。

地球と言っても『ちきゅう』と読んではいけない。地球は『ちたま』と呼ばれる星で、地球が浮いている銀河系の双子銀河にある双子星である。

雪の森

それは冷たい雪が降り続けているある日の事。

少年と少女は、真っ白な雪に沈んだ針葉樹林の奥深くにある、すきま風も防げない様な粗末な小屋で、二人きりで過ごしていた。

村から遊びに出て迷子になったのでは無い。二人とも、口減らしの為にここに捨てられたのだ。

竈と暖炉を兼ねた物が小屋に備え付けては有るが、薪も残り少ないし、何より食料が無かった。

小屋の中に猟具は有るけれども、猟の出来ない二人は、最期の饑別として渡された僅かながらのパンを、二人で分け合って食べていた。

しかし、それももう数日前に尽きた。

「お腹空いたね」

「うん……」

暗い小屋の中で少女は俯く少年に微笑みかけるが、少年は虚ろな瞳で視線を返すだけ。

少女は、空腹を抱えながら、この小屋で初めて出会った少年から聞いた話を思い出していた。

「ねえ、羊の食べ方を知ってるって言ってたよね？」

「うん……」

「もし明日起きて、それで、羊が居たら自分で食べられる？」

「屠殺の仕方は、友達から教えて貰ったから、多分出来る。なんで？」

「もしここから出られて、そうしたら羊が食べたいなって思ったの」「そっかぁ……」

それっきり少年はうとうととしてきてしまつて、痩せ細つた体を投げ出し床に横になつてしまう。

小屋には少女と少年の分、二枚の、ぼろぼろになつた掛布が有るけれども、少女は両方の掛布を少年に掛けた。

翌朝、冷たい空気の中少年が目を覚ますと、今まで自分より遅く起きた事の無い少女がまだ眠っているのに気付いた。

そして見てしまった。床に横になつた、少女の手に握られているナイフと、血の張り付いた首筋を。

少年は恐怖と共に、昨夜の少女の言葉を思い出した。

『もし明日起きて、それで、羊が居たら自分で食べられる？』

羊。彼女の言った羊というのは『迷える子羊』の事だったのか。少年は漠然とそう思った。

彼女に逃げるのかと、そう罵声を浴びせるのは簡単な事だろう。けれども少年は、涙を流す事も無くナイフを取り、子羊の腹を割いた。

少しずつ、少しずつ肉を食べる日々。

もうじき肉が無くなるだろうかというある日の事、今まで森を覆う様に降り続いていた雪が止んだ。

少年は、おぼつかない足取りで小屋を出て、ゆっくりと深く積もった雪の中を歩いて行った。

そうしてどれだけ歩いただろう。少年は村に帰る事も出来ず、暖かい雪の上へと身を沈めた。

また雪が降り始める。

雪の底に沈み行きながら、少年は自分の中に居る少女に語りかけた。

「ねえ、今になって僕は、君に恋をしたよ」

Kato plenigita

ここは、この街の中でも貴族等の富裕層が集まる一角。

住んでいるのが貴族ばかりというわけでは無いけれども、庶民の中でも富める者が多い地域だ。

私は、そんな人々が集う教会に所属する、修道院で暮らしている。修道院で私が主に担っている仕事は、香草や薬草を栽培している畑の管理だ。

香草は儀式の時にそのまま使う事もあるし、蒸留して香油を作る事もある。

薬草は勿論、誰かが病に倒れた時や怪我を負ってしまった時に使う。農村に広がるという畑程は広くないのだからうけれども、それでも手入れは労力の掛かる物だ。

今日も、私は如雨露を抱えて水を差し、痛んだ苗の葉を摘みながら、畑の手入れをしていた。

そこに聞こえてきた、耳の奥を嘗めるような小さな声。何かと聞いた私が振り返ると、畑の脇に立っている植木の根元に、金色の瞳の黒猫が座って居た。

黒猫は私の視線が不快なのか、髭をひくひくと揺らし、その場から

走り去って行った。

何処かへと行ってしまった猫を気にしていても仕方が無い。黒猫が居た木の根元から視線を外そうとした。

ふと、気がついた。木の根元に、何かが落ちていた。

先程までは何も無かった筈なので、きっとあの黒猫が啣えてきたのだろう。

もし、あの黒猫が何処かの誰かの物を持って来たというのなら、持ち主の元へと返さないといけない。

そう思い、一旦如雨露を地面に置いて木の根本にあった物を拾い上げると、それは随分とくたびれて、薄汚れて、所々が擦り切れている、灰色の猫のぬいぐるみだった。

お世辞にも作りが良いとは言えないそのぬいぐるみは、私が良く教会で顔を合わせるような方々の持ち物とは思えなかった。

畑の手入れが終わったら、一旦自室にこのぬいぐるみ置いてから、いつもお世話になっている神父様に相談しよう。そう思い、腰のベルトに付けている小物入れにぬいぐるみ押し込む。

大きいぬいぐるみというわけでは無いのだけれども、私が腰に付け

ている小物入れはそれ以上に小さいので、ぬいぐるみの頭はまるまる、小物入れからはみ出してしまっている。畑の手入れをしている間に落としてしまわないか心配だったけれども、手入れを放り出すわけにもいかない。私はまた如雨露を持って苗に水を差し、痛んだ葉を摘み始めた。

畑の手入れが終わり、如雨露を道具置き場に置いた後、神父様がいらっしゃるであろう教会へと向かった。

途中、教会へと続く道の先、敷地を区切る塀に開けられた門の側で、一人の子供が泣いているのを見付けた。

まだ背が低く、小さな手で目を擦りながら、喉が哽れるほど大きな声で泣く子供。その子供は、きちんと手入れをされてはいるけれども上等とは言えない服装で、周囲から浮いてしまっている。

おそらく、隣の区画から迷い込んできた子供だろう。きつと迷子になって心細いに違いない。そう思った私は、泣いている子供に駆け寄り、優しく声を掛ける。

「どうしました？」

迷子になってしまったのですか？」

するとその子は、しゃくり上げながらこう答えた。

「にーちゃんがつくつてくれたねこさん、さがしてるの」

「猫さん、ですか？」

作ってくれた。と言う事はぬいぐるみか何かなのだろう。

もしかしたら先程拾ったぬいぐるみだろうかと思ったが、違うという事もあり得るので、見せる前に猫の特徴を子供に訊ねる。

すると、両手を胸の前で広げながらこう答えた。

「はいいろでね、これくらいでね、しっぽとおみみがついてるの」

涙で顔をくしゃくしゃにして、鼻を嚙りながら一生懸命に説明するその子に、私は腰に付けた小物入れから、先程のぬいぐるみを取り出してまた訊ねる。

「もしかして、この猫さんですか？」

ぬいぐるみを見た子供は、目を見開いて、声を詰まらせながら手を伸ばしてきた。

「それ、にーちゃんのねこさん！」

涙で濡れた手にぬいぐるみを渡すと、子供はしっかりと猫を抱き

しめて、笑顔になる。

大事そうに、大事そうに猫のぬいぐるみを抱きしめてお礼を言う子供を見て、私は疑問に思った事が有る。

「そのぬいぐるみを、どうして無くしてしまったのですか？もしかして猫に持って行かれたとか」

訊ねてばかりで申し訳ないとは思ったけれど、子供は素直に私の疑問に答えてくれる。

「いじわるなひとに、とおくにぼいってされたの。」

それで、ぼいってされたほうにきたら、くろいねこさんがいて、にゃーって言うからついてきたら、ここにきたの」

この子が言っている黒い猫というのは、私が先程畑で見掛けた猫だろうか。

もしそうだとしたら不思議な話だし、別の猫だったとしても不思議な偶然だ。

暫く子供はぬいぐるみを抱いて安心した顔をしていたけれども、ふと私を見上げて不安そうにする。

ああ、黒猫に付いてきたと言っていたから、帰り道がわからないの

だろう。

「おうち……」

また泣きそうな顔をしている子供の頭を撫で、この街のどんな所に住んでいるかを訊ねる。

どんな所。と言われてもこの子にはよくわからなかった様で、口を尖らせている。

この場合、どう訊ねたらいいのだろうか。

私も頭を悩ませて、暫く子供の頭を撫でて、それからこう訊ねる。「君のお父さんは、どんなお仕事をしていますか？」

この街は同じ職業の者がある程度固まって住んでいる。なので、この子の親の仕事がわかれば、大体の住んでいる場所、若しくは、通っている教会がわかると思ったのだ。

私の問いに子供は、嬉しそうに父親の仕事について話し始める。

服の仕立てをしていて、偶に布の店や糸の店へ連れて行ってくれと、一生懸命に言う。

仕立て屋に布屋に糸屋。その類いの店が集まっている区画の教会に、私は心当たりがあった。

「なるほど、わかりました。」

君が通っている教会までは案内出来ると思うのですが、いつも通っている教会からは一人で家に帰れますか？」

すると子供はこう答える。

「きょうかいからは、ちゃんとおうちにかえられる！」

「ふふつ、そうですか。頼もしいですね」

得意げな顔をするその子供が愛らしく、思わず笑みがこぼれる。

それから、修道院の敷地から外に出る為には許可が必要なので、子供に少しだけ門の側で待っていて貰い、外出許可を取りに行った。

子供が通っている教会へと向かう道すがら、この子はしっかりと猫のぬいぐるみを握りしめ、両親の話をする……かと思いきや、ぬいぐるみを作ってくれたというお兄さんの話をずっとして居た。

「にーちゃんね、ぼくとにーちゃんにいっぱいふくつくってくれるの。それでね、ぼくがにーちゃんのふくきるとね、いいこだねってだっこしてくれるの」

優しいお兄さんの事を余程話したいらしく、私が相づちを打つと、

子供はにこにここと口を開く。

そうしている間にも目的の教会に辿り着き、子供は手を振りながら、路地の中へと入っていった。

修道院へと帰る道すがら、背後に視線を感じた。

何かと思い立ち止まって振り返ると、そこには金色の瞳の黒猫が居た。

黒猫は目をすっと細めて鼻を嘗めた後、ふいっと顔を背けて何処かへと姿を消した。

この素晴らしき難問

「今回はね、『キモノ』を作って欲しいのよ」

ここはとある街の一角に有る小さな仕立て屋。

この店の主人は穏やかで腕が良いと言ふことと、納期を決して破らないと言ふ事で、貴族達からも信頼を得ている。

「失礼ですがアヴェントゥリーナ様、『キモノ』と言ふのは一体何なのでしょうか？」

この店の主人であるカミーユは、お得意様の貴族、アヴェントゥリーナから聞いたことも無い単語を出されて困惑する。

笑みを浮かべては居る物の、眉尻を下げて訊ねるカミーユに、アヴェントゥリーナは付き人に用意させた何枚もの紙を見せる。

「『キモノ』って言うのは、東洋の島国、ジャポンで着られているドレスらしいのよ。」

私のお友達が一着持ってたね、すごく素敵だから私も欲しいの」

「東洋の、ですか」
カミーユは一言断り、テーブルの上に並べられた紙を一枚ずつじっくりと見る。

その紙には、少し掠れのある、けれども鮮やかな色で彩られた、

平面的な女性の絵が描かれていた。

（随分と高く髪を結って飾りを付けているなあ。これは東洋の貴族の女性かな？

それにしてもこの女性達が着ている服はどうなっているんだろう。プリンセスラインの位置が何かおかしい気がする……）

資料として出されたであろうその絵を見て、カミーユは色々と思考する。

まず、服の作りが見たことも無い物であると言う事はわかった。それから、腰に巻いている太い布はコルセットを外側に付けていると言うよりは、リボンか何かだろうという推測も出来る。

正直言つて、作りのわからない服はどの程度納期を見れば良いのかがわからないので、仕事として受けるのは抵抗がある。けれども、華やかな女性の絵を見たり、アヴェントゥリーナが楽しそうに語る様を見て、興味は湧いた。

「カミーユ君、『キモノ』を作ってくれるかしら？」

期待に満ちたアヴェントゥリーナに、カミーユは少し考えて、こう答えた。

「そうですね、この『キモノ』と言うのがどういう作りなのか全く解らないので、正規の注文としてはお受け出来ません」

「そうなの？」

「どうやら断られるとは思って居なかったようで、アヴェントゥリーナはきよとんとした顔をしている。

怒ることはしないけれども、子供のように純粋な目で、ちっと見つめてくる彼女に、カミーユは言葉を続ける。

「ですが、僕個人としてもこの『キモノ』と言う物には興味があります。

なので、僕が趣味として作って出来上がった物で宜しければ、それに値段を付けてお譲りすることは出来るかなと、そう思います」

カミーユの言葉に、アヴェントゥリーナはにこりと笑う。

「それじゃあ、作ってくれるのね？」

「努力はしますが、作ることが出来たら。と言う仮定の話ですけれどね」

仮定の話ではあるけれども。それを了承しているのかどうか定かでは無いが、アヴェントゥリーナは上機嫌で、よろしくね。と言いきり

し、店を出て行った。

それから暫く、カミーユは他の仕事の合間に、アヴェントゥリーナから預かった絵を見て色々と試行錯誤をしていた。

正面からの絵にはプリンセスラインらしき物が入っているけれども、背面からの絵には入っていない。前面だけ立体にして、背面だけ平面にしているのだろうか。

襟も、一見切り替えのような物が有るような気はするけれども、絵を見る限り一直線だ。

横から見た絵の中には、随分と脇が開いているように描かれている物も有る。これは何故開いているのか。

それに、太いリボンの下から覗いている幅の広いタック。これは何のために付いているのだろうか。

色々と考えても、『キモノ』の真相が見えてこない。

「……本当にわかんない……正規注文にしなくて良かった……」
自分の間、この事で頭を悩まされることになりそうだった。

ある日曜日の礼拝の後、神父様と少し話をしていて、ふとシスターの服が目に入った。

そのシスターはまだ若く、背が低い。着ているワンピースは袖が長く、手の甲まで覆っている。スカートも丈が長く、くるぶしまですっぽりと隠れて居るところか、腰の辺りをベルトでたくし上げて、なんとか引きずらないようにして居るようだった。

その様子を見て、なんとなく、『キモノ』を着ている女性の絵が頭に浮かんだ。

「カミーユ君、どうしました？

あのシスターが、なにか？」

神父様の言葉にはっとする。

不思議そうな顔をする神父様に、シスターの服を見せて欲しいと、カミーユは頼み込む。

シスターが良いと言えばですけれど。と神父様は言っていたが、なんとかシスター服を見せてもらおう事が出来た。

シスター服の作りを見せてもらったカミーユは、家に帰ってすぐにメ

モを取った。

シスター服はプリンセスラインが無く、『キモノ』の様に平面的だった。そして、『キモノ』を着ている絵で描かれている、リボンの下のタック、あれは飾りでは無く、あれの幅で丈を調節して居るのだろうと言う推測が立てられた。

なぜ『キモノ』の脇が大きく開いているのか、あの太いリボンはなんなのか、その謎は未だに解けないけれども、作り始めるに当たって一番障害となっていた謎が解けたので、試作を始めることが出来そうだった。

正規で請け負っていた注文を全て納品し終わった頃、暫く受注を止めて、『キモノ』の試作を繰り返した。

過去の注文で採ったアヴェントゥリーナのサイズを参考に、何着も『キモノ』を縫う。

そんな事を何度も繰り返し返し、なんとか『キモノ』の服の部分が出来上がった。

けれども、問題が一つ残っていた。

腰に巻く太いリボンを、どうやって作れば良いのかわからないのだ。

『キモノ』を作るだけでいっぱい、疲勞困憊してしまったカミーユは、第二人を居間に呼んで、知恵を借りる事にした。

資料の絵を見た上の弟、ギスタールは難しそうな顔をして言う。「うくん、なんつーか、これリボンの後ろになんか飾りみたいなの付いてるよな？」

「うん、付いてるんだけど、その扱いで困ってる……」

「見た感じ共布っぽいけど、わざわざ飾りを縫い付けてんのかな？」
「でも、縫い付けてるにしても、どこでこのリボンを留めてるのかわ

かんないんだよ」

二人で唸りながら、リボンの留め方や飾りの付け方で悩む。

その様子を見ていた下の弟のアルフォンスが、こう言った。

「別にこれ、長い巻いて結べば良いんじゃない？」

その言葉に、カミーユはほかんとする。

「えっ？ 結ぶって、なんでそう思ったの？」

「いや、何でも何も、リボンって結ぶ物だよね？」
リボンは結ぶ物。至極当たり前のことを言われ、逆に戸惑ってしま
う。

普通に結んだだけでこの絵のようになるのか。そうアルフォンスに
問いかけると、アルフォンスはカミーユに許可を取って、作業場から
細長い布を持って来た。

それを、棚の上に乗せていた猫のぬいぐるみを持って来て、胴体に
回して背中で蝶結びし、垂れている尻尾を布の下をくぐらせて引張
り上げ、蝶結びの結び目に被せる。その尻尾で結び目を包むよう
に、細い紐で固定して、紐をお腹の前で結ぶ。

すると確かに、結んだだけなのに絵に描かれているような飾りを
付けたリボンになった。

「ね？ 簡単でしよう？」

弟の発想に、兄二人はただただ驚くばかり。

驚いてはいたけれども、

「アル、ありがとう。これでアヴェントゥリーナ様に渡せそうだよ」
そうお礼を言うカミーユを見て、アルフォンスは満足そうだった。

それから少し経って、カミーユはギユスターヴと共に、『キモノ』を持ってアヴェントゥリーナの元を訪れた。

「あらー、カミーユ君、本当に作ってくれたのね〜」

『キモノ』を見て喜ぶアヴェントゥリーナの隣では、その息子が申し訳なさそうに笑って居る。

「あの、母上がまたなんか無理難題言ってしまったようで申し訳ないです」

その言葉に、カミーユは微笑んでこう返す。

「いえ、なかなか素晴らしい難問でしたよ」